

飛耳長目

森信三先生参究誌

通巻150号 平成28年5月1日発行

「修身教授録」探求（第百十四回） 修養について

森信三

我々が先生のお出で間もなしと思って、教室の入り口の戸を開けてお待ちしていると、先生入ってこられて、「冬の間は、わざわざここを開けて待っていただくに及びません」といとも丁寧に仰有られた。

「私がもし剣道の先生なら、諸君を試験するのにパツと真剣を構えて見るでしょう。そうすればその一瞬においてその人の熟、未熟のほどは分かりましょう。同様に諸君は常に自己の全力を挙げて巨人にぶつかっていくという心構えがなくてはダメです。私の希望するところは、諸君のうちから松陰先生とか尊徳翁とかいうような偉大な人傑に正面から取っ組んでいくような人が一人でも多く出てくることです。それには平素これら偉人の伝記や遺書などを心読して、いかに小さいこと一つするにも、常に我が五体の力の一切を挙げて打ち込んでいくという態度で生きることです。そこに人生の秘訣があるといつて良いでしょう。」

■修養とは

さて一口に修養といいますが、これは人によって随分その解釈が違ふことと思えます。では私は現在どう考えているかと申しますと、修養とは結局自分の生命をどこまでも鍛錬して行く道であると言つてよかろうと思つたのです。すなわちお互いに天より享け容れた我が生命に対して、いろ

いろな方面から種々なる鍛錬を加えて生命力を鍛錬してゆくことと申してよいでしょう。

■弾力性を内包する生命

ところがここに注意を要することは、弾力性というものは、単に強いという事だけでなく、そこにしなやかさというものが出て来なくてはならぬということです。このしなやかさというもののない強さは、実は真の強さではなくて、内に脆さを含むものであります。それはかの鑄鉄というものによつても分かりましょう。鑄鉄はご存知のようにハガネのような弾力がなくて一見いかにも堅そうですが、実は非常に脆いものであります。同様に人間も真の強さはかような脆い堅さではなくて、真に鍛えられた強さの半面しなやかな趣がなくてはならないのです。かくして始めて真の弾力性を持つ生命と言ひ得るのであります。

■しなやかさを

このように真の修養は自己の生命に鍛錬を加えていくことによつて、そこに強さと同時に一種のしなやかさが出てくるどころまでいくということですが、このしなやかさが出てくるということは、言い換えれば単なる我むしらの強さ、すなわち私の強さが次第に融けていくということであり、すなわちまた広く人を容

れ、他人の心持に深く同感するだけの心の広さと潤いが出てくると言うことではありません。かくして真の修養とは、かの去勢された意気地なしとか単なるお芽出度屋になることではないのはもちろん、それはまた単にガムシヤラな強さでもなくて、その半面にゆとりとしなやかさが出てこなければならぬのであります。かくして真の修養とはまさに剛柔を合わせ蔵するものでなくてはならぬと言えましょう。すなわちその剛なるにあたっては天下何者といえどもこれに及ぶ者なき至剛となり、またその柔なるにあたっては天下これほどに優しく潤いあるはまたと無いと言われるほどの至柔に至らなければならぬのであります。少なくともそこに理想があると
言えましよう。

■日本刀造りに喩えて
さて修養という事をかように考えてきますと、修養はまたこれを日本刀を鍛えることに喩え得るかとも思います。さて日本刀を鍛えるにあたって、まず必要なものは材料としての砂鉄でありますが、これはつまり生まれついたママの生得の生地素質であります。さてこれを鍛える道具としては、まず第一に土台としての鑢が必要で、その上に鉄材を置いてこれを上から打って鍛えるのであります。今修養の場合この鑢にあたるものは何かと申します

と、結局それはその人の置かれている環境境遇というものであろうと思えます。すなわちこれが私どもの修養の土台となり「場」となるものであります。今これを諸君について申せば、諸君の現在の身分すなわち天師の二部一年生という境遇がそれであり、また私としては天王寺師範の一教諭としての現在の身分がそれであります。以上は公生活の側から申したのであります。が、その他になおお互いの家庭生活の面からも、この境遇という事は言えるわけであります。

■書を読み道を聴く
では次に槌にあたるものは何かと申しますと、それは教えであろうと思えます。すなわち自分の尊敬する先生の御教えはもとよりその根本を為すのであります。その他読書もまたその重要な部分を占めるといえます。かくして人間の修養の土台となるものは、今も申したようにその人に与えられた境遇あるいは職責であります。もしこれを怠ったならば、どんなに立派な教えを聞いたとて、ちようちよと鑢無しに槌を揮うようなもので、いくら打って見たとて何らの手応えもないわけであります。すなわちこの境遇職責という土台を置かない読書や聞法というのは、いわゆる豆腐にかすがい、糠に釘の類であって、これを刀で申せば金敷きなしに刀

を鍛えんとするようなものであります。さればと云ってただただ職責を勤めてさえすればそれで良いかと言うに、必ずしもそうとは言えないのであります。というのは人間道理をわきまえない実行は、それだけ機械的になり、したがってまたそれだけその内容が乏しいわけであります。かくして真の魂の鍛錬は、ちようちよと金敷きと槌とがハッシ発しと火花を散らして相打つように、書を読み道を聴くことと、それをわが身の現在置かれている境遇職責の上に受け容れることが常に相即してゆくでなければなりません。

ところがこの読書聞法を現在わが身の境遇職責に即して受け容れていくということは、なかなか難しいことでもあります。今これを手近な諸君自身の上について申して見ても、ある者は自分の好きな書物に読み耽って宿題の提出を遅らせたり、また仮に期限には遅れないとしても、その力の入れ方が足りなくて気の抜けたようなものであったりする。そうかと思つと、また実行に偏って読書などはてんで顧みようとしない人は、どこか人間としての内容の乏しさが感じられます。かくして前者は溺れ後者は凝固して、いずれも本道の道ではないのです。実際この両者のバランスをうまくとっていくということは実に難しいことでありまして、それはあたかも綱渡りの難しさとか、丸太の一本橋を渡る難しさ

に似ていると言えましょう。しかし結局のところは実行が基本であり土台であるとともに、また実に目標そのものでもありません。読書もんぼく聞法もんぽうというが如きも要するに実行への弾力を強め、実行の内容をより豊かならしめんとするための手段に他ならないと言えましょう。してみれば修養に対する真の心がけは、結局論語にいわゆる「行つて余力あらば以て文を学ぶ」（行余学文）という一句に帰着するとも言えましょう。

■人生の痛苦を

なお日本刀の場合には度々これを水火の中に入れなくてはなりません、ではこれは修養の上では何にあたるかと申しますと、それは私は人生の苦勞に当たるのではないかと思えます。すなわち刀は水火の中に入れるでなくては、いかに叩いてみたとて真の鍛えにならないと同様に、人間もときどき痛苦や悲哀寂寥せきりょうに出逢うでなければ、いかに書を読み実行に努めましても、結局根本的な鍛えとはならないのであります。そもそも人が逆境に出遭うと言う事は、水火の中に入れて我見を焼き捨てるということでもあります。さればこそそこに人間としての強さとしなやかさが出てくるのであります。ですからもし諸君のうち、今日すでに人生の労苦を嘗めつつある人があるとしたならば、これ天がその人をして真に鍛えてやろうという天意の現れ

であります。かく人生の逆境を天意の存ずるところと、謹み受けるだけの心になつたならば、その人も先ず人生の本軌道に乗ったと申してよいでしょう。修養などと申しても結局はここから出発するものであります。

■ついでに

最後に一言簡単にしかも大事なことを申し添えますが、それは諸君らのうち「松陰全集」の予約申し込みをした人は、元来これは生徒としては分に過ぎたものでありますから、この点を常に念頭から離さず十分に感謝して、かつその感謝の念が少なくとも何処か一点諸君の家庭生活の上に見れるようにあつてほしいということです。例えばお父さんがお勤めに出られる時、これまではかつて磨いたことのないお父さんの靴を磨くともいうように、これまでしなかつたことを何か一つ二つ始める。これ生徒の身分において「松陰全集」を申し込まれた人の道だと思えます。私も我ながら無理と思うことにお奨めした責任上、特にこのことを申す次第であります。

それからもうひとつ。それは朝会とか授業とかの終わった際には、すぐに動かないでちょっと一息入れてからおもむろに動き出すべきものだという事です。諸君の内にはそうした場合、まるで「待つてました」とばかりにすぐに走り出す人があります。ああした場合にはちょっと一呼吸してからおもむろに動き出すものです。でないといかにもはしたなく見えます。時間に見れば

んの二、三秒の差ですが、そこに人間としての値打ちに大いなる開きが出てきます。こうしたところにも人間のたしなみというものがあるわけです。こうしたたしなみというものは人間生涯にわたつて必要であり、特に将来諸君の身分が上がれば上がるほど、いよいよ必要になることです。

（伊丹久照記）

（修身教授録第三巻昭和18年9月 同志同行社刊）

病氣について（微言）

森信三

○ 積尊は生老病死の四苦を以つて人生の根本的苦悩と考えたが、そのうち、生は人生の開始の苦であり、死は人生の終止の苦である。そして老とは死への接近を意味する点で苦であり、病は生そのものがおびやかされる意味にて苦であるの

○ しっかり人々の病についての苦悩には、病よりくる種々の肉体的苦痛の外、さらに、それがわが生そのものの断滅たる死に導かれる危険に対する苦悩がある。

○ もっともすべての病がこの二種の苦しみをもつわけではなくて、軽い病氣は単に肉体的苦痛のみに留まるが、重い病は生命断滅の危険を孕む。重病か否かの最も本質的な区別は、恐らくこの点にあるといつてよいであろう。

○ では病は何故に起るであろうか。根本的には身心の均衡の破れる処に病は生

ずるといふ外ないであろう。

○この病の定義に関しては、その外にも身体そのものの不調和に基づく病気もあるという人があるかも知れぬ。例えば過食暴飲等による消化器能の障碍を惹起した場合の如きを例として。

○しかし暴飲過食による胃腸の障碍は、これを結果として見れば確に肉体の調和の故障であるが、併しそこに至った内面を考えれば、食欲に対する自制力の弛緩に原因するものであり、随って本質的には身心の不調和に基づくといふべきである。

○ついでにそれでは呼吸器病の如きは如何に考えるべきであろうか。呼吸器病は英語でコンサンプションと呼ばれるように消耗病である。而して消耗の端は過労に発し、過労は身心の不調和以外の何物でもない。

○もちろん病気のうちには癌の如く今日なおその病源を明かにしないものもあるにはあるが、あらゆる病気に通じて言えることは、身心の均衡の破れということが、その根本困を為すものだといふるといふ事である。

○ただこの病の定義に対して唯一の例外がある。それはいはゆる不慮の外傷の如き場合であつて、この場合には病の原因が純粹に自己以外にある点がその特徴を為している。

○勿論外傷の場合も仔細に考えれば自己の不注目によつて生ずる場合もある。例えば刃物を以て細工物などとして「過つて怪我をした」というが如き場合である。

○しかし外傷にはこのような自己の不注意という事には関係なく、純粹に外に原因のある場合がある。例えば劇場で観劇中、突然天井が墜落して怪我をしたというような場合であつて、所謂奇禍と呼ばれるものである。

○私の今回の病気は奇禍と過労との両方が重なつたものであつて、奇禍としての肋骨骨折は誘発因であり、それによつて帰国以来積もつていた過労が出たといつてよい。

○過労と知りつつ人情に惹かされてそれに対する調節に英断を下しえなかつた不明が根本にあつたが、過労そのもので絶壁にぶつける処までゆかないうちに、奇禍によつて病臥せしめられたことは却つて幸いであつたといふべきであろう。

○もし今回の奇禍がなかつたら、私はもう少し無理を重ねて、遂に過労そのもので絶壁にぶつける処まで行つたことであらう。

○勿論その場合とても生命の危険にまで立ち到つたかどうかは分らないが、しかしそうなりうる危険性はあつたともいえよう。現に今回でさえも一時はその一

歩手前ではないかと思われたこともあつた程だから……。

○かくして今回の奇禍は世間普通の用語とは違つた意味で、私には命拾ひであつたといつてもよい。

(昭和24年11月5日発行「開頭」11月号第32号)

あとがきに替えて

終戦。建国大学崩壊。満州脱出、と書けば簡単だが、森信三先生はのたれ死に・凍餓死の覚悟の逃避行の末、命からがら敗戦の翌年の五月故國の地を踏まれたのであつた。その間の先生の痛苦は余人には到底分かりがたいであろう。先生の自伝を読んでしのぶしかない。したがって病氣について、かかる考究がなつたのだから。行余学文の思想は死ぬまで堅持すべきものかと……。 (29日二繁)

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話 0744-4513422
E-mail: hiji3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushn